Families of Preschoolers: Their Life and Psychology

Yoshiko Sato

Abstract
The purpose of this study is to examine work-life balance and co-parenting in families of preschoolers. The Participants were 366 couples. The results indicated that the father’s long working hours reduce the frequency to take care of their children. Stress in working mothers was higher than that in fathers, and yet, the negative spill over from work to home was higher among fathers than working mothers. This may be due to micro gender-politics within family.

Key words: co-parenting, work-life balance, gender role, gender politics, comparative study, questionnaire survey

問題
これまで日本国内の育児期家庭の生活の実態を捉え、居住地域による育児の多様性及び、母親の就業形態や学歴などの社会・人口動的な変数と父母の育児行動、育児感情とのかかわりを報告した（佐藤, 2011; 2012）。

ところで、国際比較研究は日本の父親の育児参与が著しく少ないと指摘している（深谷, 2008; 牧野, 2010）。その理由として日本の男性の労働時間が長いこと及び、性別役割分業意識が根強いことが挙げられてきた。

労働時間の長さは父親の育児参与に影響を与えと考えられるが、労働時間が長いのに育児参与が高い父親、反対に、労働時間が短いのに育児参与が低い父親の研究報告があることから、父親が積極的に子どもに関わることには媒介要因がある可能性が考えられる（柏木, 1993）。乳幼児を持つ父親の育児参与は仕事中心の仕事観、子どもに対する関心の低さ、子どもの価値の低さなど子ども観が関連することが明らかにされている（福丸ほか, 1999）。

性別役割分業意識が夫婦の育児の協同に与える
影響について、鶴橋（2006）は育児にそとのジェンダー・ポリティックスについて論じている。すなわち、現代家族において性差を通じて男女の不平等を生産していくようにからかうが存在し、家族はジェンダー秩序（男女の生物学的差異を理由に、絶えず男性を主体とされる性差をその補助的存位へと位置付けることによって、社会的な性格差を生み出すという社会秩序）の磁場と男女の平等主義のベクトルのせめぎ合いの場ではないかと考察した。そして、家事、育児分担をめぐるカップル間の交渉を分析する際に、夫婦間の潜在的な葛藤や、葛藤を生じさせない日常の自明性の政治性に注目し、これらをミクロなジェンダー・ポリティックスと定義している。

鶴橋の研究はフラン国のカップルを対象とするインタビューに基づいた質的データにもとづいて、稼ぎ手役割、ケア役割の配分による育児のシェアの類型論を導いている。

本研究では夫婦の育児の協同について、①育児行動、②育児感情、③育児時間、④家事分担、⑤性別役割分業についての考え方、⑥親自身の自尊心、⑦夫婦間コミュニケーション、⑧子どもへの発達期待と性別しつけ、⑨心理的ストレスの項目を用いて尋ねた（佐藤, 2011; 2012）。これに加え、親自身の年齢、学歴、職業の有無と形態、家族構成を問う。

調査の手続きについては、佐藤（2011）で報告したように、2009年から2010年かけて保育所6園と幼稚園2園において、乳幼児を持つ父母を対象に質問紙調査を実施した。質問紙調査の実施に当たっては、調査に協力していただいた保育所と幼稚園の園長先生に研究の目的と概要を説明した。調査用紙には、調査目的を記し、無記名回答であること、夫婦のマッチングのためのナンバリングをしていること、調査結果を希望する父母には回答を送付することを明記した。回収にあたっては、夫婦のプライバシーを守るため、別々の封筒で封をしたうえで返却してもらった。質問紙の配布数は962組、回収率は47%である。ペアデータ366組（有効回収率38%）についてデータ分析を行った。

本稿では、この量的データに基づき、夫婦の育児の協同について、多面的に考察することが可能である。今回の調査は、質問紙調査を用いた社会・人口動態的な変数が父親と母親の自己認識や、夫婦間コミュニケーション、心理的ストレスにどのような影響を与え、それが夫婦の育児行動・育児感情にどうかかわっているのかを検討する。そして、そこで日本の夫婦の育児の協同を阻む要因が父親の長い労働時間であるのかを検討し、夫婦間のミクロのジェンダー・ポリティックスの実態を考察する。

結果と考察

（1）父親の仕事時間と育児行動・育児感情

以上の調査研究（佐藤, 2011）において、夫婦の「育児行動」尺度の構造を明らかにするため、全20項目について全調査協力者のデータによる因子分析を行い「生活習慣のしつけ」、「身体的な世話」、「遊び」の3因子が得られている。また、「育児感情」全14項目については「子ども・子育てへの肯定感」、「子育てへの否定感」、「子どもからの独立性」の3因子が得られている。

父親の1日の仕事時間が比較的短い10時間以下の111名と14時間以上19時間以上の長時間群88名の2群に分け、上述の「育児行動」3因子および「育児感情」3因子とのかかわりをみた、家庭教育に関する国際比較調査報告書（国立女性教育会館、平成16・17年度）によれば、父親の1週間の仕事時間が35時間以上49時間未満で44.1%であり、60時間以上は22.7%である。本調査の父親のほうがより長時間労働に従事しているといえる。

Table 1 父親の仕事時間の長短群別の育児行動

<table>
<thead>
<tr>
<th>父親の仕事時間</th>
<th>父親</th>
<th>短群 (n=111)</th>
<th>長群 (n=88)</th>
<th>t値</th>
<th>sig.</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>育児行動</td>
<td>生活習慣のしつけ</td>
<td>2.75 (0.75)</td>
<td>2.73 (0.62)</td>
<td>0.13</td>
<td>n.s.</td>
</tr>
<tr>
<td>身体的な世話</td>
<td>2.45 (0.83)</td>
<td>2.17 (0.70)</td>
<td>2.65</td>
<td>**</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>遊び</td>
<td>2.83 (0.71)</td>
<td>2.73 (0.64)</td>
<td>0.97</td>
<td>n.s.</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

*注: 項目: 平均値 (SD), **p < .01*
Table 2 父親の仕事時間の長短群別の育児感情

<table>
<thead>
<tr>
<th>育児感情</th>
<th>父親</th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td>短群</td>
<td>長群</td>
<td>t値</td>
<td>sig.</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>子ども・子育てへの肯定感</td>
<td>4.22</td>
<td>4.35</td>
<td>-1.56</td>
<td>n.s.</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>(n=111)</td>
<td>(n=88)</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>子育てへの否定感</td>
<td>2.30</td>
<td>2.22</td>
<td>0.76</td>
<td>n.s.</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>(n=68)</td>
<td>(n=72)</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>子どもの独立性</td>
<td>3.90</td>
<td>3.85</td>
<td>0.52</td>
<td>n.s.</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>(n=66)</td>
<td>(n=73)</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

注: 数値: 平均値(SD)

なお、仕事時間と学歴の間に相関はみられなかった (r(357)=.016, n.s.)。

まず、育児行動についてみると、「生活習慣のしつけ」と「遊び」については2群間で差はみられなかった。「身体的な世話」についてのみ、仕事時間の短い群のほうが、仕事時間が長い群と比較してよく行っている（Table 1）。

次に、育児感情についてみると、父親の仕事時間の長さによって、父親の育児感情はどの面についても違いはみられなかった（Table 2）。

フルタイムで働く母親とその配偶者である父親の家庭内外労働と家庭内労働（家事・育児）に従事する時間を比較した（Table 3）。母親は育児と家事時間の合計と、7時間以上を家庭内労働に割いており、夫婦の育児の協同からは程遠い働き方を余儀なくされている。父親の意識と行動は、母親、とりわけ、フルタイム職の母親に、稼ぎ手としての役割とケア役割の二つを等しく担う状況に追い込み、大きな負担をかけている。

Table 3 フルタイムの母親とその夫の育児・家事・仕事時間（対応のあるt検定）

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>数値</th>
<th>平均値</th>
<th>t値</th>
<th>sig.</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>育児時間</td>
<td>121</td>
<td>4.36</td>
<td>2.38</td>
<td>(1.42)</td>
</tr>
<tr>
<td>家事時間</td>
<td>109</td>
<td>2.83</td>
<td>0.83</td>
<td>(0.89)</td>
</tr>
<tr>
<td>仕事時間</td>
<td>113</td>
<td>8.95</td>
<td>12.11</td>
<td>(2.56)</td>
</tr>
</tbody>
</table>

注: 数値: 平均値(SD), ***p < .001

（2）夫婦間コミュニケーションと夫婦の育児行動・育児感情

乳幼児を育てる夫婦を対象とする実証的研究から、夫婦間コミュニケーションがスムーズであれば、夫婦間の親密な信頼関係の形成・維持に寄与し、母親が夫からのサポートを受けていると感じることにつながり、育児不安を低減するという間接的効果が指摘されている（石・桂田, 2006)。また、多重役割を従事する子育て期夫婦を対象とした研究からは、夫の家庭関与度が妻と夫の夫婦関係満足度を規定することが報告されている（伊藤ほか, 2006)。これらの研究から、夫婦関係の満足度と夫婦の育児行動が相互に関係されていることが示唆されている。そこで、本研究では夫婦間コミュニケーションや夫婦関係満足度を問い、夫婦の育児の協同とのかかわりをみた。

「夫婦間コミュニケーションに関する調査」では、母親と父親を対象として、①平日の平均的な会話時間、②その会話時間についての満足度、③夫婦関係についてうまくいっていると思うかを尋ねた。これ以外にも母親に対して、④子どもを手助けして夫婦だけで遊びに出かける行動、⑤子どもを支えて夫婦だけで旅行に出かける行動、⑥お祝いの日のプレゼントや特別な食事をするかを尋ねた。

まず、夫婦の会話時間を妻と夫の回答別に示し

Table 4 夫婦の会話時間

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>妻</th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td>人数</td>
<td>%</td>
<td>人数</td>
<td>%</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>会話時間</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>ほとんど話さない</td>
<td>7</td>
<td>1.9</td>
<td>7</td>
<td>1.9</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>10分未満</td>
<td>33</td>
<td>9.0</td>
<td>30</td>
<td>8.2</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>10〜30分未満</td>
<td>108</td>
<td>29.5</td>
<td>106</td>
<td>29.0</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>30〜60分未満</td>
<td>115</td>
<td>31.4</td>
<td>108</td>
<td>29.5</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>60〜90分未満</td>
<td>56</td>
<td>15.3</td>
<td>65</td>
<td>17.8</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>90〜120分未満</td>
<td>24</td>
<td>6.6</td>
<td>21</td>
<td>5.7</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>120分以上</td>
<td>21</td>
<td>5.7</td>
<td>26</td>
<td>7.1</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>無回答</td>
<td>2</td>
<td>0.5</td>
<td>3</td>
<td>0.8</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>合計</td>
<td>366</td>
<td>100.0</td>
<td>366</td>
<td>100.0</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>
た。これによると、夫婦間の1日の会話時間は60分未満が夫、妻のいずれの回答でも7割近い（Table 4）。

次に、会話時間に関する満足度は、充分と考えているものよりも短いとみているものが、妻、夫いずれで多く、妻では52.2%，夫では54.1%が「短いと思う」と答えている。夫婦がお互いによく長く会話できるとされていることがわかる（Table 5）。

Table 5 会話時間の満足度

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>妻</th>
<th>夫</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>会話時間の満足度</td>
<td>数値</td>
<td>%</td>
</tr>
<tr>
<td>充分だと思う</td>
<td>169</td>
<td>46.2</td>
</tr>
<tr>
<td>短いと思う</td>
<td>191</td>
<td>52.2</td>
</tr>
<tr>
<td>長いと思う</td>
<td>3</td>
<td>0.8</td>
</tr>
<tr>
<td>無回答</td>
<td>3</td>
<td>0.8</td>
</tr>
<tr>
<td>合計</td>
<td>366</td>
<td>100.0</td>
</tr>
</tbody>
</table>

上述の6項目のうち、④子どもをあずかれて夫婦だけで遊びに出かける行動、⑥子どもをあずかれて夫婦だけで旅行に出かける行動、⑥お祝いの日のプレゼントや特別な食事をするというかえしたケースが少なかったため、「夫婦関係得点」は、会話時間「30分以上」を1点、会話時間「充分だと思う」を1点（「短いと思う」、「長いと思う」は0点とした）、夫婦関係が「とてもうまくいっている」または「どちらかというとうまくいっている」と回答した場合を0点として、合計3点満点とした。

夫婦関係得点が0点から1点を低群、2点から3点を高群として、夫婦関係得点の高・低による育児行動の3因子のt検定を行った（Table 6）。その結果、父親においては、「生活習慣のしつけ」と「身体的な世話」において有意差がみられ、夫婦関係得点の高群が低群よりも有意に高い。「遊び」についても高群のほうが低群より高い傾向がみられた。父親は夫婦関係がよいときに育児により参加する傾向があるといえるだろう。他方、母親においては、どの面でも夫婦関係得点の高低による育児行動の有意差がみられない。父親においては、母親との関係において育児行動に違いが見られるということは、父親に、「育児は母親が主に担うもの」という認識があり、夫婦関係がよいと、妻をより多くサポートするため、子育てへの参加が多くなるのではないか。

また、夫婦関係得点の高低と育児感情について検討した（Table 7）。母親においては夫婦関係得点高群のほうが夫婦関係得点低群より「子育ての否定感」が有意に低かった。父親においても、夫婦関係得点高群のほうが夫婦関係得点低群より「子育ての否定感」が低い傾向がみられた。上述の育児行動の分析結果と考え合わせると、母親

Table 6 夫婦関係得点の高・低による育児行動の比較

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>父親</th>
<th>母親</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>育児行動</td>
<td>低群（n=109）</td>
<td>高群（n=249）</td>
</tr>
<tr>
<td>生活習慣のしつけ</td>
<td>2.58（.66）</td>
<td>&lt;2.79（.69）</td>
</tr>
<tr>
<td>身体的な世話</td>
<td>2.25（.75）</td>
<td>&lt;2.44（.80）</td>
</tr>
<tr>
<td>遊び</td>
<td>2.73（.67）</td>
<td>2.88（.69）</td>
</tr>
</tbody>
</table>
注：†p<.1，*p<.05，**p<.01

Table 7 夫婦関係得点の高・低による育児行動の比較

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>父親</th>
<th>母親</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>育児行動</td>
<td>低群（n=109）</td>
<td>高群（n=249）</td>
</tr>
<tr>
<td>子ども・子育てへの肯定感</td>
<td>4.29（.57）</td>
<td>4.22（.62）</td>
</tr>
<tr>
<td>子育てへの否定感</td>
<td>2.38（.66）</td>
<td>2.24（.67）</td>
</tr>
<tr>
<td>子どもからの独立性</td>
<td>3.77（.71）</td>
<td>3.84（.68）</td>
</tr>
</tbody>
</table>
注：†p<.1，**p<.01
においては、夫との関係によって子どもへのケアに違いはみられないが、育児に関わる気持ちの上では異なるということである。

以上のことから、先行研究と同様に、夫婦関係が良好であることと育児との関係は連関がみられ
た。母親は夫婦関係により育児行動への影響を受
けることによりみられず、父親については「生活
習慣のしつけ」と「遊び」においてより多く子ども
と関わる傾向がみられた。他方、母親については
良好な夫婦関係が育児感情の「子ども・子育てへ
の否定感」の低減とかかわることが唆される。

(3) 父親と母親の自尊心の発達

母親の自己意識と育児不安の関連についてはす
でにいくつかの報告がなされている。保育園児を
持つ母親のディストレスを検討した研究では、自
分の意見をはっきり言え、他人の言動に動かされ
ずに自分を信じる傾向が高い場合に育児不安が低
いことが確認されている（石・桂田、2010）。他
方、産後の母親を対象とする研究では、自分に対
する自信を持つ母親ほど理想的な母親役割が高く、
むしろ育児不安が高いという報告がある（渡辺、
篠原、2010)。

一般に、自尊心が高いことは問題解決能力が高
いとされるので、育児不安は低いと予想されるが、
父親と母親、そして、母親の就業形態によって、
父母の自尊心に違いがみられるかどうかをここで
みる。そして自尊心と育児感情のかかわりを検討
する。

父親と母親の自尊心はローゼンバーグの自尊心
尺度10項目（遠藤ほか、1992）によって測定した。

まず、母親の場合をみよう。フルタイムで働く
母親、パートタイムで働く母親、専業主婦の母親
を自尊心得点によって比較した（Table 8）。フル
タイム群とパートタイム群の間に自尊心の発達の
有意差はみられない。そして、家事・育児に専念
する専業主婦群が仕事と家事・育児を同時におこ
うパートタイム群より自尊心が高い傾向がみられる。
先行研究においても、日本では仕事を持つ女性と
専業主婦の女性の間に自尊心の発達の違いがみら
れていない（渡邉、1998）。仕事を持つ女性は男性
並みには仕事をできないし、専業主婦並みには
家事・育児をできずどちらも十分遂行できないと
いう二重基準に心理的に拘束されているからでは
ないかとされる。

なお、過去1年間の収入の夫と妻の割合につい
て、全体を10とした時の妻の貢献度を母親に尋ね
た。家庭の収入全体を10とするとときに、フルタイム
の妻の収入が占める割合の平均値は3.80（SD
1.24、120人）であり、パートタイムの妻は2.12
（SD 1.20、131人）であった。フルタイムで働く
母親は家庭の収入の4割近くを担おうとしながら、パート
タイムの母親、専業主婦と比べて自尊心が高い
わけではない。日本の女性においては、自分の収
入を持つことや家計への貢献が自尊心の高さと必
ずしも結びつくわけではないといえよう。

一方、父親についてはどうであろうか。専業主
婦の妻を持つ父親はフルタイムで働く妻を持つ父
親と比較して、5%水準で有意に自尊心が高い。
パートタイムで働く妻を持つ父親と比較して、
0.1%水準で有意に自尊心が高い。このことから、
男女共同参画が進められる今日でも、自分の収入だ

<table>
<thead>
<tr>
<th>表 8 母親の就業形態3群別の父母の自尊心</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>自尊心</td>
</tr>
<tr>
<td>母親</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>父親</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

注. † p < .1, *p < .05, ***p < .001
けで家族の生活を支える働き手であり、妻からの実質的、感情的ケアを受け取る側に立つ夫（柏木・平山，2001）は自尊心が高いことが推測される。

さらに、パートタイムで働く妻を持つ父親は、フルタイムで働く妻を持つ父親と比較して有意差こそないが、自尊心が最も低いのがうかがえる。

Table 9 父母の自尊心の比較：対応のあるt検定

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>母親</th>
<th>父親</th>
<th>t値</th>
<th>sig.</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>自尊心</td>
<td>2.73</td>
<td>&lt;2.82</td>
<td>-2.74</td>
<td>**</td>
</tr>
</tbody>
</table>

注．数値：平均値（SD），**p<.01

Table 10 父母の自尊心と育児感情の相関

<table>
<thead>
<tr>
<th>子ども・子育て</th>
<th>子育てへのへの肯定感</th>
<th>否定感</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>母親の自尊心</td>
<td>.329***</td>
<td>-.472 ***</td>
</tr>
<tr>
<td>父親の自尊心</td>
<td>.344***</td>
<td>-.433 ***</td>
</tr>
</tbody>
</table>

注．数値：相関係数，***p<.001

夫婦の自尊心を比較すると、夫の自尊心の平均値のほうが妻より1%水準で有意に高い（Table 9）。日本では子どもをもつ女性の自尊心が男性より低いのが特徴であるが（佐藤，2009）、成長しても同様であることがみられる。そして、母親、父親とともに、自尊心は育児感情の「子ども・子育てへの肯定感」と正の相関があり、逆に、「子育てへの否定感」との間には負の相関がある（Table 10）。

(4) 多重役割を担う母親のストレスとネガティブ・スピリオーバー

既婚女性の就業率は上昇しているが、その中でも乳幼児を育てながら働く女性の肉体的、精神的負担はきわめて高いと推測される。先行研究において、多重役割を担う母親は家庭役割から仕事役割へのネガティブ・スピリオーバーが父親と比べて有意に高いが、その一方で両役割間のポジティブ・スピリオーバーも父親と比べて有意に高いことが報告されている（福丸，2000）。

本研究では父親と有職の母親のワーク・ライフ・バランスを検討するため、父親及び仕事を持つ母親を対象に、仕事役割から家庭役割へのネガティブ・スピリオーバーを「家においても仕事のことと考える」、「私の妻（夫）は私の気持ちが家庭よりも仕事に関することに不満を持っている」、「子どもの誕生日でも重要なことが多いので仕事に優先する」3項目で問うた。また、ストレスを測定する5項目（頭痛・不眠・一日の終わりの強い疲労感・イラライラしたり、怒りっぽくなる・うつうつ）について5段階で尋ねた。

まず、父親と有職母親のストレスを比較すると0.1%水準で母親のストレスが高い（Table 11）。

Table 11 有職母親（自営業含む）と父親のストレスの比較（対応のあるt検定）

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>有職母親</th>
<th>父親</th>
<th>t値</th>
<th>sig.</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>ストレス</td>
<td>(n=265)</td>
<td>(n=265)</td>
<td>2.15</td>
<td>&gt;.189</td>
</tr>
</tbody>
</table>

注．数値：平均値（SD），***p<.001

次に、母親の就業形態によるストレスの比較をする。フルタイムとパートタイムの2群間で有意差はみられない。父親のストレスについては、妻がパートタイムの場合、フルタイムで働く母親

Table 12 母親の就業形態別の父母のストレスの比較

<table>
<thead>
<tr>
<th>母親</th>
<th>人数</th>
<th>平均値（SD）</th>
<th>t値</th>
<th>sig.</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>フルタイム</td>
<td>122</td>
<td>2.06 (.72)</td>
<td>-1.59</td>
<td>n.s.</td>
</tr>
<tr>
<td>パートタイム</td>
<td>133</td>
<td>2.21 (.77)</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>父親</th>
<th>t値</th>
<th>sig.</th>
<th>多重比較</th>
<th>sig.</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>妻がフルタイム</td>
<td>121</td>
<td>1.78 (.67)</td>
<td>3.05 *</td>
<td>妻がフル/妻がパート *</td>
</tr>
<tr>
<td>妻がパートタイム</td>
<td>133</td>
<td>2.00 (.79)</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>妻が主婦</td>
<td>91</td>
<td>1.85 (.64)</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

注．*p<.05
である場合と比較して5%水準で有意に高い（Table 12）。
有職の母親と父親についてそれぞれ、育児感情とストレスの相関をみたものが Table 13 である。母親、父親のいずれにおいても「子ども・育てへの否定感」とストレスの間に正の相関がある。また母親については、「子ども・育てへの肯定感」とストレスの間に負の相関がある。

Table 13 育児感情とストレスの間の相関

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>有職母親</th>
<th>父親</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td>(n=274)</td>
<td>(n=274)</td>
</tr>
<tr>
<td>子ども・育てへの肯定感</td>
<td>-.194</td>
<td>-.064</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>**</td>
<td>n.s.</td>
</tr>
<tr>
<td>子育てへの否定感</td>
<td>.438</td>
<td>.266</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>***</td>
<td>***</td>
</tr>
<tr>
<td>子どものからの独立性</td>
<td>-.046</td>
<td>-.060</td>
</tr>
</tbody>
</table>

注: 数値: 相関係数 **p<.01, ***p<.001

さらに、共働きで乳幼児を育てる夫婦の心理的ストレスや、家庭に仕事を持ちこむことが夫婦の間でどのように関与するのかをみると。その際に、フルタイムで母親が働く家庭と、パートタイムで働く家庭を比較する。
まず、Table 14 に示したように、フルタイムで母親が働く家庭では、妻の仕事時間と妻自身のストレスの間に5%水準で正の相関がみられ、長い仕事時間が心身の負担になっていることが伺える。また、妻の残業時間と妻のストレスには0.1%水準で正の相関がみられ、夫にとって妻の長い仕事時間が心の負担になっている。そして、夫とフルタイム職の妻のストレスには0.1%水準で正の相関がみられた。
他方、夫とパートタイム職の妻のストレスには相関がみられない（Table 15）。夫の仕事時間と夫自身のストレスの間には有意傾向がみられるが、妻の仕事時間と、妻自身のストレスには相関がみられない。

職業生活が夫婦関係と心理的健康に及ぼすクロスオーバーについて検討した先行研究（伊藤ほか, 2006a; 伊藤ほか, 2006b）では、夫婦の一方に生じた事象が他方に影響を及ぼすクロスオーバー、妻の就業形態によって異なることを報告している。妻の就業形態別にみると、妻フルタイムの夫婦は「個別化型（自立型）」で、妻パートの夫婦は妻の仕事へのコミットメントが夫の心理的健康に影響を及ぼす「共振型」の夫婦関係であると結論付けている。伊藤ほか（2006a）の研究は小学生の子どもを持つ夫婦を研究対象とし、伊藤ほか（2006b）の研究は中学生、大学生の成長した子どもを持つ中年期の夫婦を対象としている。乳幼

Table 14 仕事時間、残業時間とストレスの相関係数：妻フルタイム122人とその夫

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>夫のストレス</th>
<th>妻の1日の仕事時間</th>
<th>夫の1日の仕事時間</th>
<th>妻の残業時間</th>
<th>夫の残業時間</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>妻（フルタイム）のストレス</td>
<td>.349</td>
<td>.230</td>
<td>.085</td>
<td>.079</td>
<td>.138</td>
</tr>
<tr>
<td>夫のストレス</td>
<td>***</td>
<td>**</td>
<td></td>
<td>**</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>.064</td>
<td>.070</td>
<td>.377</td>
<td>.126</td>
<td>***</td>
</tr>
</tbody>
</table>

注: 数値: 相関係数 ***p<.001, *p<.05

Table 15 仕事時間、残業時間とストレスの相関係数：妻パートタイム137人とその夫

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>夫のストレス</th>
<th>妻の1日の仕事時間</th>
<th>夫の1日の仕事時間</th>
<th>妻の残業時間</th>
<th>夫の残業時間</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>妻（パートタイム）のストレス</td>
<td>.056</td>
<td>-.028</td>
<td>-.146</td>
<td>-.006</td>
<td>.009</td>
</tr>
<tr>
<td>夫のストレス</td>
<td>-.004</td>
<td>.160</td>
<td>-.138</td>
<td>.141</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

注: 数値: 相関係数, †p<.1
児を持つ夫婦を対象とした本研究では、妻フルタイムの夫婦が「共振型」と言うだろう。乳児を育てながらフルタイムで働く妻の多忙さ、夫を巻き込むには面倒があることが推測される。あるいは、妻フルタイムの夫婦では、子どもが成長するにつれて、「共振型」から「個別化型」へ移行することも考えられる。

妻パートタイムの夫婦では、上述のように妻の仕事へのコミットメントが夫の心理的健全に影響を与えている。しかし、報告したように、乳児を育てる家庭では、パートタイムの妻を持つ家族と比較して、妻がフルタイムの場合には「身体的困難」「体験」が多かった（佐藤，2012）ことを考慮合わせると、パートタイムの母親の育児の生活面と心理面の両方における孤児奮闘が推測される。

さて、上述の仕事のネガティブ・スキルオーバーの3項目の合計点（0～3点）の平均値について、父親と有職母親の間でt検定を行った（有効回答237組）。その結果、仕事役割を家庭役割に持ち込むネガティブ・スキルオーバーは父親のほうが0.1%水準で有意に高いことが明らかになった（Table 16）。

Table 16 仕事役割から家庭役割へのネガティブ・スキルオーバー：母親が有職の夫婦（対応のあるt検定）

<table>
<thead>
<tr>
<th>母親</th>
<th>父親</th>
<th>t値</th>
<th>sig.</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>0.79</td>
<td>1.27</td>
<td>-6.46</td>
<td>***</td>
</tr>
<tr>
<td>(0.78)</td>
<td>(0.83)</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>
注．数値：平均値(SD)．***p<.001

さらに、母親の就業形態別にみると、母親についてフルタイムとパートタイムの母親で有意差がみられないのに対し、父親についてはみると、妻がフルタイムとパートタイムの場合で有意差がみられ、妻がパートタイムのほうが仕事役割から家庭役割へのネガティブ・スキルオーバーが5%水準で有意に高い（Table 17参照）。

Table 17 仕事役割から家庭役割へのネガティブ・スキルオーバー：母親の就業形態別t検定

<table>
<thead>
<tr>
<th>母親</th>
<th>父親</th>
<th>t値</th>
<th>sig.</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>フルタイム</td>
<td>パートタイム</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>(n=109)</td>
<td>(n=125)</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>0.77</td>
<td>0.78</td>
<td>-0.13</td>
<td>n.s.</td>
</tr>
<tr>
<td>(0.80)</td>
<td>(0.76)</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>
注．数値：平均値(SD)．*p<.05

乳幼児を持つ母親は仕事と家庭の多重役割を担うため、総労働時間は父親より母親のほうが長いことが確認されている（田中，2000）。本データでも、家庭外労働と家庭内労働を合わせた総労働時間は父親の15時間16分と比べて、母親のほうが

<table>
<thead>
<tr>
<th>母親</th>
<th>父親</th>
<th>t値</th>
<th>sig.</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>妻がフルタイム</td>
<td>妻がパートタイム</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>(n=115)</td>
<td>(n=130)</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1.10</td>
<td>1.36</td>
<td>-2.56</td>
<td>*</td>
</tr>
<tr>
<td>(0.81)</td>
<td>(0.82)</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>
16時間5分と長い。

上述のTable11に示したように、ストレス度は有職母親のほうが父親より有意に高いのであるが、母親においては、仕事を家庭に持ち込むこととストレスの間に相関がないのはなぜだろうか。

これは家事時間・育児時間が夫の間で不均衡であっても、仕事を家庭に持ち込むことをせずに、自分の仕事の継続と夫との育児の協同を成立させてている母親のミクロのジェンダー・ポリティクスではないだろうか。そして、男女の性別役割分業が根強い日本の社会の「母親は本来家庭にいて子育てに専念するもの」というマクロのジェンダー・ポリティクスが夫婦の心理状態に影響を及ぼしているといえるだろう。

（5）夫婦の性別役割分業意識と育児の協同

父親の性別役割分業意識と家事・育児分担の関係を見る。家事時間・育児時間の長さによってそれぞれ3群化し、クロス表¹²を使って、「家事・育児分担低群」「家事育児分担高群」を抽出した。「家事・育児分担低群」「家事育児分担高群」の2群の性別役割分業意識を比較したものをFigure1に示した。「家事・育児分担低群」は性別役割分業意識の得点が、「家事育児分担高群」より有意に低い（1%水準）。すなわち、父親の性別役割分業の意識と家事・育児分担の行動とは一致している。夫婦の育児の協同を阻む要因のひとつは父親の性別役割分業意識であることが確認された。

![Figure1](image)

注：性別役割分業意識を理想とする方が得点が高い。数値：平均値。

文献

蓑谷文雄（2007）：共働きで夫はストレスがたまるのか。永井聡子・松田茂樹（編）：対等な夫婦は幸せか。pp.63-76。東京：労働者新聞。

遠藤辰雄・井上洋治・蘭千尋（1992）：ローゼンバーグの自尊心尺度、星野命（訳）、セルフ・エスティームの心理学（p.264）。京都：ナカニシヤ出版。

深谷昌志（2008）：育児不安の国際比較 東京：学文社。

福丸由佳（2000）：共働き世帯の夫婦における多重役割と抑うつ度との関連、家族心理学研究.14(2), 151-162。

福丸由佳・無藤隆・飯長喜一郎（1999）：乳幼児期の子供を持つ親における仕事観、子ども親：父親の育児参加との関連、発達心理学研究.10(3), 189-198。

船橋恵子（2006）：育児のジェンダー・ポリティクス。東京：労働者新聞。

平山順・柏木恵子（2001）：中年期夫婦のコミュニケーション態度：夫と妻は異なるのか？発達心理学研究.12(3), 216-227。

伊藤裕子・相良順子・池田政子（2006a）：多重役割を従事する子育て期夫婦の関係満足度と心理的健康・妻の就業形態による比較。聖徳大学研究紀要 人文科学部.17, 33-40。

伊藤裕子・相良順子・池田政子（2006b）：職業生活が
中年期夫婦の関係満足度と主観的幸福感に及ぼす影響：妻の就業形態別にみたクロスオーバーの検討。発達心理学研究，17（1），62-72。

牧野カツ・渡辺秀樹・松橋恵子・中野洋志・編著。（2010）。国際比較に見る世界的家族と子育て。京都：ミネルヴァ書房。

水落正明。（2007）。夫婦で仕事と家事の交渉は可能か。永井暁子・松田茂樹。（編）。対等な夫婦は幸せか。（pp.47-61）。東京：労務書房。

佐藤淑子。（2009）。日本の子どもと自尊心。東京：中公新書。

佐藤淑子。（2011）。ワーク・ライフ・バランスと乳幼児を持つ夫婦の育児の協同・日本の中の多様性一。霊倉女子大学紀要，18，15-26。

佐藤淑子。（2012）。父親と母親の就業生活及び家族生活と家事・育児行動。霊倉女子大学紀要，19，25-35。

渡邉香・篠原ひとみ。（2010）。産婦人科における育児不安の治療。秋田大学医学部保健学科紀要，18（2），1-9。

渡邉恵子。（1998）。女性・男性の発達。柏木恵子。（編）。未婚・家族の心理学（pp.233-292）。京都：ミネルヴァ書房。

全体の有効回答366人。

注3）Table3はデーターであるが、ここでは有職母親を回答を得られたすべての父親と比較した。

フルタイムの母親人数平均値（SD）最小値最大値
育児時間1224.36（1.32）0.509.00
家事時間1212.79（1.41）0.107.00
仕事時間1198.97（1.74）2.2414.50
総労働時間11816.09（2.47）7.4422.40

全父親人数平均値（SD）最小値最大値
育児時間3452.12（1.34）0.108.00
家事時間2980.74（0.59）0.033.50
仕事時間33812.30（2.70）5.9419.50
総労働時間27715.27（2.67）9.0022.34

母親の総労働時間16.09は16時間5分に換算。父親の総労働時間15.27は15時間16分に換算した。

注4）育児時間と家事時間のクロス表

<table>
<thead>
<tr>
<th>育児時間</th>
<th>家事時間</th>
<th>30分</th>
<th>45分</th>
<th>以上</th>
<th>合計</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1時間以下</td>
<td>36</td>
<td>40</td>
<td>17</td>
<td>93</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1時間半〜2時間半</td>
<td>20</td>
<td>39</td>
<td>33</td>
<td>92</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>3時間以上</td>
<td>19</td>
<td>29</td>
<td>61</td>
<td>109</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>合計</td>
<td>75</td>
<td>108</td>
<td>111</td>
<td>294</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

要旨

本研究は、育児期家族において、社会・人口動的でな変数数が、父親と母親の自己認識や性別役割分業意識、夫婦間コミュニケーション、心理的ストレスなどのような影響を与える、それが育児の協同にどうかかわっているかを検討した。対象者は乳幼児を育てる366組の夫婦である。主な結果は、(1) 父親の労働時間が長い場合、子どもの身体的な世話の頻度が少ない。(2) 夫婦間コミュニケーションがよいと、父親は子どものしつけ、遊びの行動を多くする。(3) 父母の自尊心は育児への肯定感と相関があるが、母親の就業形態による自尊心に顕著な違いはみられない。(4) 心理的ストレスは有職母親の方が父親より高いが、仕事から家庭へのネガティブ・スピリオーバーは父親の方が高く、家庭内のミクロのジェンダー・ポリティックスの可能性が示唆された。

(2012年9月28日受稿)